

F/T12

FESTIVAL/TOKYO



イエリネク三作連続上演

光のない。/ 作：エルフリーデ・イエリネク

演出：三浦 基(地点) 音楽監督：三輪真弘

Jelinek Series: Kein Licht. / Text: Elfriede Jelinek

Direction: Motoi Miura (Chiten)

Music Direction: Masahiro Miwa

11/16(Fri) - 11/18(Sun)

東京芸術劇場 プレイハウス

Tokyo Metropolitan Theatre, Playhouse



2020年オリンピック・
パラリンピックを日本で!

© Naoya Hatakeyama



『光のない。』演出ノート

三浦 基

身体性について気がついたこと

身体とは環境における体のことであり、環境とは物語とっていい。ナイフを突きつけられれば、体は凍る。ナイフを取り出すには、事件が必要である。事件を説明するのに物語が生まれる。だから物語がなければ体は凍らない。

凍らない体の蔓延は、舞台において許されないから、劇は常に事件を必要とした。事件をどう運ぶのかということに熱中した。私は今、ギリシャ悲劇まで遡っている。そこではナイフなんてせこい小道具ではなく、戦争が環境となる。しかし、ギリシャ悲劇が劇の原初だとして、では今、ギリシャ悲劇をそのままやったところで、我々の身体にはそぐわないだろう。神と戦争に頼るのはごめんだ。そこで身体は困るのである。

物語を捨てる。それは身体を捨てることである。ナイフは取り出さない。いや、取り出せない。これがポストドラマ演劇と呼ばれる現代演劇の闇である。物語を期待している観客は、悪い事は言わない、今すぐ席を立つか、あきらめて寝てもらうしかない。私は本気で言っている。なぜならば、それが歴史だからだ。私のせいじゃない。いや、私のせいかもしれない。せっかく物語があってもそれをわざわざ壊すのだから。しかし、今回はその心配はない。イェリネクである。ナイフもピストルも登場しない。イェリネク作品が難解なのは、物語がわからないからである。この作家は物語を捨てている。では何を書いているのか。

政治性について気がついたこと

政治と政治性は違う。政治は具体的な行動

を伴う活動のことである。今、問題にしているのは政治性という普段からちりちりとくすぶっているよくわからない人間の性^{さが}についてである。人はひとりでは生きてゆけない、などと大見得を切ってみようか。ひとりでも生きてゆけると錯覚させる現代の闇は、政治性を墮落させる。ヒューマニティという言葉は死語なのか？ 人と社会の関係性が希薄になれば政治は廃れる。だから演劇がしつこく政治性を持たないといけない。これ、私にしてはめずらしい政治的発言。

政治性とは関係性と言ってもよい。劇は関係性によって成り立つ。誰との？ ロミオとジュリエットとのではない。イェリネクは、わたしとあなたとのでもないと言っている。わたしはあなたであり、わたしたちでありあなたたちだと一見、ふざけたことを言っている。イェリネク作品での主語に「わたしたち」が頻出するのは、政治性を問うた結果である。つまりイェリネクが書くのは、物語ではなくわたしたちに起こった「出来事」についてなのだ。残念ながら、震災があった。それに伴う原発事故があった。

アクチュアリティについて気がついたこと

社会事変に便乗することの危険は、表現に関わる立場の者ならば誰もが警戒していると信じている。マスメディアは報道という立場でより早く、より正確な情報を伝えることを使命とする。しかし、芸術はそういう迅速さや正確さには価値を置かない。だから、震災に関することをこんな早い時期に扱うことは危険だと思っている。これだけは言っておくべきだと思うのだけど、私は原発に反対か賛成かをみなさんの前で言うつも

りはない。中学生の時に反原発の漫画を読んで、反対だと思った。でも、その漫画の表現自体にあまり興味を持たなかったので忘れてしまっていた。あなたはこのわたしの忘却を責めますか？

私が反原発の政治活動をやらなかったことを責められまい。原発の是非については、デモに参加したり投票で意思表示するからほっておいて欲しい。これが社会人としての普通感覚だと私は思っている。だからこの劇が、みなさんに反原発を訴えるはずはないし、そんなつもりは毛頭ない。これ、私にしてはかなり踏み込んだ個人的発言。

リアリティという言葉は、いつの間にかアクチュアリティにすり替わってしまった。私のリアリティがみんなのリアリティなんてかわいい感覚ではもう駄目で、もっと大きな文脈を背負うべきとい

う強制的な響きをもって私には聞こえる。「君にはアクチュアリティがないなあ」って言われたらちょっと困る。「君にはリアリティがないなあ」と言われたら、相手を睨むことができるだろう。つまり対話が始まる。が、どうもそんな対話は古いので人々は敬遠する。誰だかわからない立場で、アクチュアリティを武器に個をいち早く捨てる術を持った。私は、だからアクチュアリティと闘うつもりだ。口が裂けてもこの言葉を簡単には使わないようにしたいと思う。

ところで、『光のない。』は、東日本大震災と福島原発事故がテーマになっているアクチュアリティ満載の作品です。嘘です。イエリネグがこうしたテーマを選んだことがアクチュアリティなのではなく、この出来事に彼女が「わたしたち」の一員だと宣言したことが、アクチュアルなのである。



この作家には驚く。私は重い腰をあげた。

木を見て森を見ず

もう一度、身体性について考えなければならない。イェリネクは、自分の戯曲は演劇のテキストではあるが上演のためのテキストではないと言う。つまり書いてある通りに演出しなくてもよいという意味だ。あるいは、書いてある通りにやっても上演は難しい、ということだ。繰り返しになるが、物語による劇の推進を前提とした場合にイェリネク戯曲は難解なのであって、我々はそこから自由でなければいけない。

しかし、それが歴史の必然だとしても私にとって不自由な点がひとつある。いや、むしろ不自由

であるべき事柄として、やはり身体のことだろう。身体をないがしろにはできない。だってそこに俳優優がいるんだから。私はこれだけは手放さない。そのために三輪氏の音楽が活躍するだろう。そのために観客という立場にも踏み込むだろう。今、あせて森を見てはいけない。だってそんな全体のことなんか誰もわかってないんだから。誘^{いざな}ってくれる物語もないんだから。今できることは、「森を見ずに木を見て」なのだと思う。イェリネクの木々はどこを切っても血が吹き出すのだから。

最後に、どうかこの劇を席を立たずに、そして寝ることもなくお楽しみいただければやっぱり幸いです。

三浦基(演出):演出家

1973年生まれ。劇団「地点」代表。桐朋学園大学演劇科・専攻科卒業。99年より2年間、文化庁派遣芸術家在外研修員としてパリに滞在。演出のほかに、アートマネージメントや芸術監督の仕事全般を学ぶ。2001年帰国、地点の活動を本格化。05年、東京から京都へ拠点を移す。07年より〈地点によるチェーホフ四大戯曲連続上演〉に取り組み、同年『桜の園』にて文化庁芸術祭新人賞受賞。08年には初のオペラ作品『流刑地にて』（原作：フランツ・カフカ、作曲：フィリップ・グラス）の演出に取り組み、高く評価された。また12年には、ロンドン・グローブ座からの招聘により初のシェイクスピア作品『コリオレナス』を演出し、成功をおさめている。

著書に『おもしろければOKか?現代演劇考』（五柳書院）。11年京都市芸術新人賞受賞。フェスティバル/トーキョーへは「一とこでアルトールさん、」（10年）に続き、今回が二度目の参加となる。



©Hisaki Matsumoto

三輪眞弘(音楽監督):作曲家

1958年東京生まれ。78年渡独、国立ベルリン芸術大学で作曲をイサン・ユンに、85年より国立ロベルト・シューマン音楽大学でギュンター・ベッカーに師事。80年代後半からコンピューターを用いた作曲の可能性を探求し、特にアルゴリズム・コンポジションと呼ばれる手法で発表した作品群は国際的な評価を受け、数多くの賞を受賞している。9月にリリースされた管弦楽作品集CD『村松ギヤ(春の祭典)』をはじめ、著書に『三輪眞弘音楽藝術—全思考1998-2010』ほか。10年度第61回芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。情報科学芸術大学院大学(IAMAS)教授。



木津潤平(美術):建築家

1969年愛知県生まれ。(株)木津潤平建築設計事務所代表。東京大学で香山壽夫氏に師事。96年同大学院建築学専攻修了。94年よりク・ナウカ・シアターカンパニーに参加し、『マハーバーラタ』（第3回朝日舞台芸術賞）などの空間デザインを手掛ける。東京国立博物館や日比谷公園などの「場の力」を最大限に活用した劇場空間でも知られる。建築の分野では、米国建築家協会 Japan Design Award 大賞、英国 Architectural Review Awards など、海外からも高い評価を受けており、中でも2012年竣工の「パッシブソーラーオフィス SOLA」は、次世代に求められる建築としてさまざまな賞を受賞している。

エルフリーデ・イエリネク、言葉と政治、現代演劇

林 立騎（翻訳者）

かつてあるインタビューでみずからの芸術に対する姿勢を問われたイエリネクは、「政治的な内容にとどまりつつ、言語的な実験を続けたい」と述べた。たんなる政治的作家でも実験的作家でもなく、それらを両立させたいというのである。それはおそらく、現代において「政治的な内容」が「言語的な実験」を必要としているという確信に基づいている。

20世紀ドイツの法学者カール・シュミットは、政治とは「友」と「敵」を分けることだと定義した。その定義は今なお生き延びている。賛成か反対か、支持か不支持か、存続か撤廃か。「友か敵か」のバリエーションをわたしたちは日々目にしている。立場を鮮明にすることは、「わたし」や「わたしたち」にアイデンティティを与え、安定を生む。しかし他方で、一部だけ反対、条件付きで賛成、今は賛成とも反対とも言えない、等々の割り切れない、分け切れないものを排除し兼ねない。決めきれないまま居心地の悪い思いを抱えつづけることは難しく、「今、ここ」での決断を迫るような「空気」が、あたりを満たしていないだろうか。

「政治的」で「挑発的」な作家として知られるイエリネクだが、彼女の政治性とはそうした党派性のことではない。むしろイエリネクが「政治的な内容」に対して持ち込むのは、決めきれない居心地の悪さ、安定を許さない絶えざる違和感である。だがそれはいかに実現されるのか。

第一に、複数の意味やイメージを同時的にも

つ言葉によって。東日本大震災と福島原発事故をきっかけに執筆された『光のない。』において、そのタイトルは希望が失われた状況を示すと同時に、啓蒙の「光」が文明を進歩させた果ての光景として原発事故を捉える。つまり「光」はその肯定的な側面と否定的な側面を同時に明らかにする。そのときわたしたちは「光」を「友」とも「敵」とも言えない。「友か敵か」の思考が複雑な現実を単純化して提示するのだとすれば、イエリネクはむしろ現実の複雑性が極まるようなポイントを見つけ出す。イエリネクは、さまざまな党派性を同時に包む言葉を見つけ出すことで、より根底的な問題（「光」とはなにか、これ以上の「光」は必要なのか、「光」のなさにも価値はないか、等々）を浮かび上がらせる。それは政治の現場では行われ難い実践である。だからこそ彼女は「政治的な内容」を「言語的な実験」に晒すのだ。

そして第二に、「今、ここ」の問題を敢えてまったく別の時代や文化と結びつけることによって。東日本大震災から一年と一日が経った2012年3月12日、イエリネクは自身のHPで新作『光のないII（エピローグ？）』を発表した。これはやはり福島原発事故や放射性物質の問題を扱う作品だが、同時に約2500年前に生まれた最も有名なギリシャ悲劇、ソフォクレスの『アンティゴネ』（ヘルダーリンによるドイツ語訳）を引用している。両者はもちろん直接に関係しない。だが過去を「客人」として招き、「今、ここ」を敢え

で中断し、断片化し、複数化することで、イエリネクは歴史を、あるいはわたしたちの現在を、「エピローグ」とともに連続性と安定性の中へ沈められることから救済するのである。

そもそもわたしたちが直面している現実とは、「今、ここ」だけで考えても、「友か敵か」だけで分けても、もはや生産的に展開しないのではないか。演出家ヨッシ・ヴィーラーは、イエリネクのテキストでは「人物が語るのではなく、文明、文化、現代の総体が語っている」と述べている。それはシュミットとは別のかたちで現代の政治を問い直す言葉なのである。

人物や時代、場所の指定がほとんどなく、無数の意味やイメージが襲のように折り畳まれたイエリネクのテキストは、演出次第でさまざまに上演できる。ポストドラマ演劇と呼ばれる、もはや戯曲の再現を至上命題としない現代演劇にふさわしく、新作が書かれるたびにドイツ語圏の大劇場で話題になる。

ほとんど散文詩に近いような作品を取って「演劇テキスト」として発表することには明確な意図があるだろう。すなわち、言葉が声になること、そして言葉が別の誰かによって咀嚼され、上演という別のかたちへ変わることをイエリネクは求め、そうなるべきものを書いている。上演には、イエリネクが執筆の出発点とした政治的出来事をさらに挑発的に示すものもあれば、ヨッシ・ヴィーラーのように哲学的な側面を声として響かせるものもあるし、パフォーマンスに近いものもある。今回のF/T12は、三浦基による『光のない。』の舞台上演、高山明による『光のないⅡ』の野外ツアー上演、さらにドイツからヨッシ・ヴィーラーの『レヒニッツ』客演と、エルフリーデ・イエリネクのテキストに対する複数の「出会い」が一堂に会する貴重な機会である。イエリネクのテキストのさまざまな上演は、現代演劇の政治性と実験性を、また現代演劇の言葉が、そして上演がいかに現代と対峙できるかを、わたしたちに明確に示すだろう。

エルフリーデ・イエリネク：詩人、小説家、劇作家

1946年オーストリア生まれ。ウィーン大学で演劇学と美術史を学ぶ。主な作品に、ベストセラーとなった小説『したい気分』『欲望』戯曲『ブルク劇場』『トーテンアウベルク』『雲。家。』『杖、竿、棒』などがある。ビュヒナー賞等の数々の演劇賞のほか、ドイツ語圏の最も重要な戯曲賞「ミュールハイム戯曲賞」を4回(02, 04, 09, 11年)受賞している。83年の小説『ピアニスト』は2001年に映画化され、その年のカンヌ映画祭で三部門受賞して話題を集めた。04年「豊かな音楽性を持つ多声的な表現で描いた小説や戯曲によって、社会の陳腐さや抑圧が生む不条理を暴いた」として、ノーベル文学賞を受賞。邦訳されている小説や戯曲も多く、近年ではフェスティバル/トーキョー09春にて『雲。家。』が上演されている。



©Hilde Zemann

作：エルフリーデ・イエリネク
翻訳：林立騎

演出：三浦基（地点）
音楽監督：三輪眞弘
美術：木津潤平
出演：安部聡子、石田大、窪田史恵、河野早紀、小林洋平（以上、地点）
合唱隊：石田遼祐、板野弘明、小柏俊恵、黒田早彩、平良頼子、中原信貴、
野口亜依子、林美希、藤崎優二、幣真千子、村田結、米津知実

衣裳：堂本教子
照明：大石真一郎（KAAT）
音響：徳久礼子（KAAT）
舞台監督：山口英峰（KAAT）
舞台監督助手：今西祥太
技術監督：堀内真人（KAAT）
制作：田嶋結葉（地点）

協力：急な坂スタジオ、IAMAS 新しい時間における表現研究プロジェクト

PIRIPIRI 開発：長嶋洋一（静岡文化芸術大学）
記録写真：松本久木

F/T スタッフ
制作統括：武田知也
制作アシスタント：小野塚央
インターン：伊藤芽依
フロント運営：荒川真由子
プログラム・ディレクター：相馬千秋

F/T クールー
安達彩、鹿子木直美、佐藤杏子、佐藤友香里、中村みなみ、永井彩子、
人見麻美、増渕圭、松嶋瑠奈、丸山未来、矢島絢、山口侑紀

製作：フェスティバル／トーキョー、地点
制作協力：KAAT 神奈川芸術劇場
助成：EU・ジャパンフェスト日本委員会
主催：フェスティバル／トーキョー

**EU
JAPAN
fest**

Text: Elfriede Jelinek
Translation: Tatsuki Hayashi

Direction: Motoi Miura (Chiten)
Music Direction: Masahiro Miwa
Stage Design: Junpei Kizu
Cast: Satoko Abe, Dai Ishida, Shie Kubota, Saki Kohno, Yohei Kobayashi (all for Chiten),
Chorus: Ryosuke Ishida, Hiroaki Itano, Toshie Ogashiwa, Sahaya Kuroda,
Yoriko Taira, Nobutaka Nakahara, Aiko Noguchi, Miki Hayashi, Yuji Fujisaki,
Machiko Hei, Yui Murata, Tomomi Yonezu

Costumes: Kyoko Domoto
Lighting: Shinichiro Oishi
Sound: Reiko Tokuhisa (KAAT)
Stage Manager: Eiho Yamaguchi (KAAT)
Assistant Stage Manager: Shota Imanishi
Technical Manager: Mahito Horiuchi (KAAT)
Production Co-ordination: Yuna Tajima (Chiten)

In co-operation with Steep Slope Studio,
IAMAS Resarch Project for expressions in cyber space and time

"PIRIPIRI" Developer: Yoichi Nagashima(Shizuoka University of Art and Culture)
Photography: Hisaki Matsumoto

F/T Staff
Production Co-ordination: Tomoya Takeda
Assistant Production Co-ordination: Chika Onozuka
Trainee: Mei Ito
Front of House: Mayuko Arakawa
Program Director: Chiaki Soma

F/T Crew
Aya Adachi, Naomi Kanakogi, Kyoko Sato, Yukari Sato,
Minami Nakamura, Sayako Nagai, Mami Hitomi, Kei Masubuchi, Runa Matsusima,
Mirai Maruyama, Aya Yajima, Yuki Yamaguchi

Produced by Festival/Tokyo, Chiten
Production Co-operation: Kanagawa Arts Theatre
Supported by: EU-Japan Fest Japan Committee
Presented by: Festival/Tokyo

フェスティバル/トーキョー組織委員

Festival/Tokyo Organization Committee

天牛大生	振付家、演出家
萩田伍	アサヒグループホールディングス株式会社 代表取締役会長 兼 CEO
扇田昭彦	演劇評論家
永井多恵子	社団法人国際演劇協会 (ITI/UNESCO) 日本センター会長
蛸田希雄	演出家
蛸田秀樹	演出家
野村高	狂言師
福原義春	株式会社資生堂 名誉会長

Ushio Amagatsu	Choreographer, Director
Hiroshi Ogita	Chairman and Representative Director, Chief Executive Officer, Asahi Group Holdings, Ltd.
Akihiko Senda	Theatre critic
Takeo Nagai	Chairman, Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO)
Yukio Ninagawa	Director
Hideo Onuma	Director
Man Nomura	Kyogen actor
Yoshihara Fukushima	Executive Chairman, Shiseido Co., Ltd.

主催：フェスティバル/トーキョー実行委員会
東京都、豊島区、
東京文化発信プロジェクト室・東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）、
公益財団法人としま未来文化財団、NPO法人アートネットワーク・ジャパン

Organized by Festival/Tokyo Executive Committee
Tokyo Metropolitan Government, Toshima City, Tokyo Culture Creation Project & Tokyo Metropolitan Theatre
(Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture), Toshima Future Culture Foundation,
Arts Network Japan(NPO-JN)

共催：社団法人国際演劇協会 (ITI/UNESCO) 日本センター

Produced in association with Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO)

協賛：アサヒビール株式会社、株式会社資生堂

Sponsored by Asahi Breweries, Ltd., Shiseido Co., Ltd.

助成：公益財団法人アサヒグループ芸術文化財団

Supported by Asahi Group Arts Foundation

後援：外務省、公益社団法人日本芸能実演家団体協議会

Endorsed by Ministry of Foreign Affairs, GEIDANKYO

特別協力：武蔵浦検本店、東武百貨店池袋店、サンシャインシティプリンスホテル、
ホテル メトロポリタン、ホテル グランドシティ、チャコット株式会社、株式会社白永社

Special co-operation from SEIBU IKEBUKUROHONTEN, TOBU DEPARTMENT STORE IKEBUKURO, Sunshine City Prince Hotel,
Hotel Metropolitan Tokyo, Hotel Grand City, Chacott Co., Ltd., Hakusuisha Publishing Co., Ltd.

協力：東京商工会議所豊島支部、豊島区商店街連合会、豊島区町会連合会、
豊島区観光協会、社団法人豊島産業協会、公益社団法人豊島法人会
Toshima City Shopping Street Federation, Toshima City Association, Toshima City Tourism Association,
Toshima Industry Association, Toshima Corporation Association

宣伝協力：株式会社ポスターハリス・カンパニー、
有限会社ネビュラエクストラサポート（公募プログラム）

PR support: Poster Hari's Company, Nebula Extra Support Co., Ltd. (for F/T Emerging Artists Program)

メディアパートナー：J-WAVE 81.3 FM、新潮、ART IT、CINRA.NET

Media Partners: J-WAVE 81.3 FM, SHINCHO, ART IT, CINRA.NET

認定：公益社団法人企業メセナ協議会

Approved by Association for Corporate Support of the Arts

平成24年度文化庁地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ

Supported by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan in the fiscal 2012

会期：平成24年（2012年）10月27日（土）～11月25日（日）



F/Tクルー：会津麻美、青島美和、安達 彩、石引康子、一ノ瀬真志、岩城泰士、上杉康政、宇都宮千陽、内海ちさき、遠藤乃利子、大泉尚子、大賀啓子、大庭愛香、岡崎由子、緒方彩乃、岡本光代、岡本佳子、尾澤弥生、三好 尊、加藤真帆、廣子直美、金子積高、川口 麗、木口七海、木下玉美、金 幸子、計 智繪、桐谷佳美、黒沢久美、小嶋聖子、齊藤 聖、斎藤絵里佳、崎濱恵梨、佐藤春香里、佐藤 聖、島崎 子、後田知子、鈴木智香子、間島弥生、高橋悠生、田中希希、寺本奈津美、黒沼静香、陶 順夏、水杉彩子、中村直樹、中村みづみ、中山由紀、西田幸行、能戸みな美、畑端富美、初村和子、花田雅美、早川 菜葉、林原 菜、人見麻美、廣瀬加乃、福原麻妃子、根村 舞、藤原蘭太、船山結菜、増尾 圭、松嶋曜奈、村田早絵、松本琉帆、丸山未来、三輪泰正、関 慧友、矢島 剛、内藤司、山口侑紀、山室木園、山分将司、丹野亜希、吉田由貴、米谷今日子、渡辺 史

F/T Crew: Mami Aizu, Miwa Aoshima, Aya Adachi, Yasuko Ishibiki, Takashi Ichinose, Taito Iwaki, Yasunasa Usugui, Chikaki Utsunomiya, Chikaki Utsuni, Noriko Endo, Ozumi Naoko, Keiko Ogo, Aika Omichi, Yuki Okazaki, Ayano Ogata, Mitsuyo Okamoto, Yoshiko Okamoto, Yayoi Oizawa, Chihiro Ono, Maki Hato, Naomi Kaneko, Joy Kaneko, Akane Kawaguchi, Nanami Kiyuchi, Tamami Kiyuchi, Hiroko Kozaki, Nozomi Sakai, Erika Saito, Eri Sakihama, Yukari Sato, Kyoko Sato, Momoko Shimotori, Tomoko Shibata, Chikako Suzuki, Yuki Sekijima, Yusuke Takahashi, Yuki Tanaka, Natsumi Teramoto, Shizuka Terumura, Kuru Tota, Sayako Nakano, Naoki Nakamura, Mimi Nakamura, Yuki Nakayama, Takayuki Nishikimi, Miremi Noto, Fumi Hatake, Kazumi Hattamura, Masami Hanada, Haruna Hayakawa, Shiori Hayashibara, Mami Himoto, Kano Hirose, Mariko Kikuchi, Kenta Fukunaga, Kenta Fujiwara, Yuna Funakawa, Kei Masubuchi, Rina Matsushima, Sae Matsudo, Yoya Matsumoto, Mirai Moriyama, Yasunaka Mitsuru, Hyemin Min, Aya Tojima, Seiji Tanaka, Yuki Yamaguchi, Kizeno Yamamura, Masashi Yamawake, Aki Yumino, Yuki Yoshida, Kyoko Yonemitsu, Sara Yonemitsu

編集：鈴木理映子、フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局

発行：フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局

アートディレクション+デザイン：佐藤直樹+中澤耕平 (ASYL)

オペレーション：小村 剛

印刷：アトミ株式会社

発行日：2012年11月16日

禁無断転載

フェスティバル/トーキョー実行委員会

Festival/Tokyo Executive Committee

名誉実行委員長	高野之夫	豊島区長
実行委員長	市村作知雄	NPO法人アートネットワーク・ジャパン 会長
副委員長	吉末昌弘	豊島区文化商工部長
委員	八巻規子	豊島区文化商工部文化デザイン課長
	大沼映雄	公益財団法人としま未来文化財団 常務理事・事務局長
	岸正一	公益財団法人としま未来文化財団 部長
	遠池奈緒子	NPO法人アートネットワーク・ジャパン 代表
	相馬千秋	NPO法人アートネットワーク・ジャパン プログラム・ディレクター
監事	天貝 勝己	豊島区総務部総務課長
法務アドバイザー	福井健策	北海道弁護士（常置型法律事務所）

Honorary President of the Executive Committee: Yoko Takano, Mayor of Toshima City
Chairman of the Executive Committee: Sachio Ichimura, Arts Network Japan Committee
Vice Chairman of the Executive Committee: Masahiro Yoshida, Director of Culture, Commerce and Industry Division of Toshima City
Committee Members: Noriko Yamaki, Culture, Commerce and Industry Division, Director of Cultural Design Section
Hideo Onuma, Director of Secretariat of Toshima Future Culture Foundation
Masato Kishi, Executive Manager of Toshima Future Culture Foundation
Naoko Hasegaki, Arts Network Japan Representative
Chika Seta, Arts Network Japan Program Director
Supervisor: Katsumi Amagai, General Affairs Division, Director of General Affairs Section of Toshima City
Legal Advisors: Kenzaki Fukui, Hisato Kitazawa (Kotto Dou Law Office)

フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局

Executive Committee Office

プログラム・ディレクター	相馬千秋
事務局長	運池奈緒子
事務局長補佐	小島寛大
制作統括	武田知也
制作	河合千重、喜友美綾江、小森あや、相山由香、 戸田史子、藤井さゆり
メディア戦略	松本花音
プログラム・リサーチ	クラウドハイム・ウルリケ
アジア事業コーディネート	小山ひとみ、李 丞孝
票務管理	兵衛理江、穴戸内
チケットセンター	佐々木由美子、佐藤久美子
総務	葦原円花、一色 善好
経理	堤久美子
制作アシスタント	坂原美沙、砂山弘織、田中沙季、田野入涼子、中山亜以
メディア戦略補佐	冠郷真奈
アジア事業コーディネート補佐	吉岡真衣子
インターン	伊藤芽依、小林弘樹、田端俊也、船橋史、吉崎香央里
技術監督	賀川英司
技術監督アシスタント	河野千晴
照明コーディネート	佐々木真幸子（株式会社ファクター）
音響コーディネート	相川晶（有限会社サウンドウィズ）
アートディレクション+デザイン	アジール（佐藤直樹+中澤耕平+谷藤みづ+徳永明子+菊地昌隆）
ウェブサイト	演田真一・田中裕也（株式会社ロフトワーク）
パブリシティ	平昌子、望月章宏
海外広報・翻訳	アンドリュース・ウィリアム
物販	渡辺淳
編集・執筆	鈴木理映子
編集・執筆（「TOKYO/SCENE」）	影山裕樹

Program Director: Chika Soma
Administrative Director: Naoko Hasegaki
Assistant Administrative Director: Hirotsune Kojima
Production Manager: Tomoya Takeda
Production Co-ordinators: Chika Kawai, Orie Kiyuna, Aya Komori, Yuka Sugiyama, Fumiko Toda, Sayuri Fujii
Media Strategy: Kanako Matsumoto
Program Research: Ulrike Krauthelm
Asia Projects Co-ordinators: Hitomi Oyama, Seunggho Lee
Ticket Administration: Rie Nagahara, Tsuburo Shikida
Ticket Office: Yumiko Sasaki, Kumiko Sato
Administrators: Madoka Ashihara, Hisayoshi Isshiki
Accounting: Kamiko Tsutsumi
Assistant Production Co-ordinators: Chika Onozuka, Shiori Sunagawa, Saki Tanaka, Suzuko Tanori, Ai Nakayama
Assistant Media Strategy: Nanaka Kanami
Assistant Asia Projects Co-ordinator: Makiko Yoshioka
Trainees: Mei Ito, Hiroki Kobayashi, Toshiya Tabata, Fumi Funahashi, Kaori Yoshizaki
Technical Director: Eiji Terakawa
Assistant Technical Director: Chizuru Kono
Lighting Co-ordination: Makiko Sasaki (Factor Co., Ltd.)
Sound Co-ordination: Akira Aikawa (Sound Weeds Inc.)
Art Direction+Design: Asyil (Naoki Sato + Kohel Nakazawa + Yoko Tani + Akiko Tokunaga + Masataka Kikuchi)
Website: Shinichi Hamada + Yoko Tanaka (Istawa+Tanaka)
Public Relations: Masako Taira, Akihito Mochizuki
Overseas Public Relations, Translation: William Andrews
Merchandise: Jun Watanabe
Editor/Writer: Rieko Suzuki
Editor/Writer (TOKYO/SCENE): Yuki Kageyama

お問合せ先

フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局

〒170-0001

東京都豊島区西池袋4-9-1 にしすがも創造舎 NPO法人アートネットワーク・ジャパン内

TEL: 03-5961-5202

HP: <http://festival-tokyo.jp/>